

## 明晰夢

### 蜻蛉

夢の中で、私は毛むくじやらの器を持っていた。器は、赤く透き通った液体と、ぶよぶよとした灰白色の塊で満たされている。器とその中身が、私の額から上に当たる部分、脳と頭蓋であることに気が付いた。

器の感触を今一度確かめてみよう。そうだ。私が毎日安物のシャンプーで洗っている頭部。指には馴染みのごわごわとした質感を感じるが、頭部には何の感覚もない。かつて自分の体の一部だったものが、自分の外部に現れている。奇妙な感覚だ。

赤く透き通った液体、私の血液だった液体をすすってみる。幼いころに舌を這わせた傷口と同じ味がした。違うところと言えば、その量だ。口いっぱいに含んでも、頭蓋の中には赤いスープがたっぷり波打っていた。私の罪、欲望、嫉妬、怠惰なんか溶け出したスープ。そのスープが私の喉を駆け下り、腹に溜まって消化され、別のなにかとして再び私の一部となる。

灰白色の脳はただぶるぶると光を照り返していた。今私の脳は手の中にあって、私自身からは切り離されている。それなのに、私は頭皮の感触を感じ、血液を味わい、次はその脳に指を突っ込もうとしている私を食おうとしている私は一体誰だ。ずぶりと指が塊に埋まってゆく。私が指を埋めたこの物体は一体何だ。ひだの一部がぼろりと剥がれ、欠片が指の中でぶるぶると揺れる。指の中のこれと頭蓋の中の塊はどう違うんだ。欠片を口に運び、舌の上で転がす。この感触はどこで感じられているんだ。噛み潰した瞬間に背筋に走った、得も言われぬ快感は一体何だ。咀嚼するたび記憶が消える。飲み下すたび思考が絶える。脳を破壊し食する一切の動作に、絶頂じみた快楽を感じる。顔面がスープと涎と毛髪にまみれても気にならなかった。やがて私は私の脳を食らい尽くし、全ての記憶と全ての思考を失った。今ここに、私は死んだのだ。そんな夢だった。